



地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成事業

奥村, 弘
市沢, 哲
坂江, 渉

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 4(平成17年度事業報告書):109-125

(Issue Date)

2006-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002236>



(5)

地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成事業

事業概要

本年度の活動内容

本年度は、プロジェクトの2年目にあたり、来年度のカリキュラム確定を視野に入れ、授業（講義・実習）を試行することが、主な活動となった。

○講義（地域歴史遺産保全活用基礎論）

地域連携センターが進めてきた連携活動の成果を整理し、地域の資料の保全と活用、文書館・博物館をめぐる問題と新しい取り組み、地域の建築物の保全と活、地域の歴史的な自然環境というテーマをたて、後期にリレー講義を実施した。内容については、講義要旨を参照）。受講生からは、大学での研究を社会で活用する本講義の視点を評価する声が多かった。しかし、講師一人一コマの担当であったため、一コマの中で、連携活動にはいるまでの経緯や、フィールドの個別的な特性など、講義の前提を説明した上で、本論を展開しなくてはならず、「詰め込み」気味の授業になった。この点をふまえ、次年度の授業計画ではテーマのたて方、授業の構成を見直す必要がある。

○実習（地域歴史遺産保全活用実習）

地域連携センターの活動フィールドを活用し、地域歴史遺産の保全活用をはかる現場での実習を

後期に展開した。具体的な実習内容については、個々の報告に譲るが、実習の企画段階から、大学院生が参加することで、より実践性の高い実習になったと考える。

来年度の計画

○講義（地域歴史遺産保全活用基礎論A・B）

次年度は、今年度の授業内容を再整理した基礎論Bに加え、基礎論Aを開講する。基礎論Aでは、（1）歴史的建造物、美術工芸品の保全と活用、地域歴史遺産の活用など、基礎論Bでカバーできなかった対象を取り上げるとともに、地域経済、地域の福祉（バリア・フリー）の観点から地域歴史遺産の活用を考える応用的な内容を盛り込む。

○実習（地域歴史遺産保全活用実習A・B）

昨年度の実習を地域歴史遺産の保全実習と活用実習に整理し、保全を実習A、活用を実習Bとする。実習フィールドの設定は、相手側の都合に左右されることが多く、不確定な要素が多い点をどう克服するかなど、安定的に実習を実施するシステムについても考える。

（文責・市沢哲）

地域歴史遺産保全活用基礎論（GPリレー講義）の開講

文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム（「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成」事業）の一環として、文学部で地域歴史遺産の保全・活用をはかる人材育成のための基礎的教育プログラムを試行した。授業科目名は、「地域歴史遺産保全活用基礎論」（大学院修士課程の開講講座名は「日本地域文化論特殊研究」）とし、当センターの担当教員、および何人かの研究員を講師とするリレー講義をおこなった（計13回）。

センターでは今年度前半からリレー講義に関する担当者（坂江）をおき、講義計画の素案づくりをすすめ、センター内でその中身に関する議論を詰めた。今年度はこれまでのセンターの連携事業での経験や提携先諸機関の取り組みや企画に焦点をしぼり、素材としては地域歴史遺産のうち、と

くに「文献史料」（古文書等）の保全・活用の問題を中心に扱うことにした。

担当講師はセンター内関係者（研究員・担当教員）のほか、外部から大国正美氏（神戸深江生活文化史料館副館長）、辻川敦氏（尼崎市立地域研究史料館課長補佐）、大村敬通氏（小野市立好古館館長）、そして工学部の足立裕司教授にお願いした。開講直前の2005年9月27日（火）には、担当講師の大部分が集まり、相互の講義予定の中身を紹介し、それぞれがスムーズにバトンタッチできるよう工夫した。

以下、今年度の講義の文学部シラバス（講義要項）を掲載し、さらに各授業内容の概略を示す。

《講義形式》

□授業科目名：「地域歴史遺産保全活用基礎論」
（大学院修士課程の開講講座名は「日本地域文化論特殊研究」）

□単位数：2

□単位教官名：複数（リレー講座形式）

□開講曜日・時限：水曜日1時限（8:50～10:20）

□開講日：2005年10月5日水曜日

□履修指定：全学学生履修可（ただし文学部を除く1年生は履修不可）

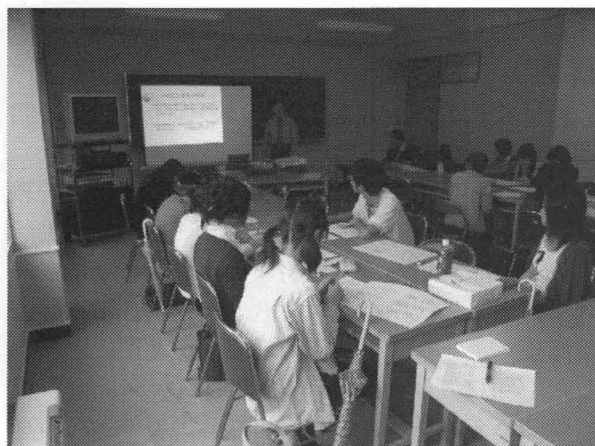
□講義のねらい

現在、多くの地域社会では、地域内の歴史遺産や文化財の保存・活用・継承を積極的にすすめていくための人材の育成が必要とされている。本講では、この問題をめぐりこの間各地でおこなわれてきた具体的な活動や、新たな取組等を素材にして、地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的能力の養成・獲得をめざす講義をおこなう（リレー講義形式）。

これを通じて受講生が、地域社会にとって史料を残すことの意味、新しい史料や文化財の利用の仕方、地域内の身近な生活資料をどのように復元・展示（提示）していくかなどの点を学べるよう努力する。

《講義内容の概略》

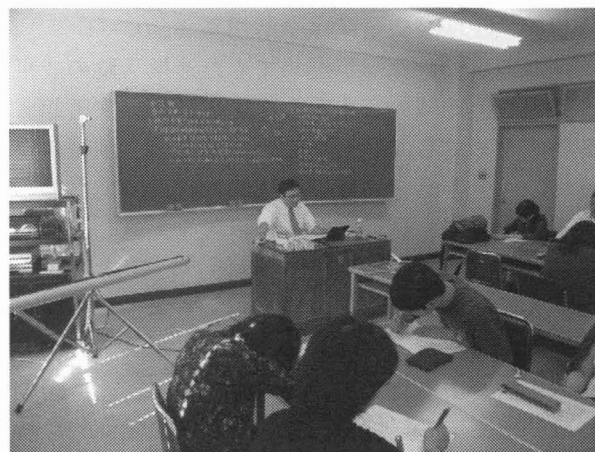
(1) 2005年10/5 奥村弘（文学部助教授）「開講（序論）」



本講義は、地域歴史遺産保全活用基礎論の序論として展開したものである。ここでは、阪神淡路大震災での歴史資料保全活動とそれを支えた歴史資料ネットワークについて論じることによって、現代社会における地域歴史遺産をめぐる現状と課題を明らかにした。さらに本講義では、新たな地

域歴史遺産の活用の事例として新宮町や小野市の事例を取り上げ、地域歴史遺産の保全活用を、地域連携事業の中から具体的に考え、その後の授業展開への展開方向を明確にした。

(2) 10/12 木村修二（文学部地域連携センター研究員）「地域文献史料保全論」



本講は、地域歴史遺産である文献史料をめぐり、伝来の仕方、それを取り巻く諸問題、保全という3つの視点から論じた。地域文献史料は、先祖伝来のものとして意識的に保管されている場合や自治的な団体により組織的に継承されている場合もあるが、むしろ忘却され死蔵されていたものがたまたま今日まで伝来するケースが多い。それらの多くはすでに非現用となり、行政的には不要といえる状態にあるが、その地域の辿った歴史を知るのにこの上ない存在として、極めて重要な意味をすでに持っているのである。それゆえにこそその保全が図られなければならないのであるが、こんにち地域文献史料は様々な滅失への危機に取り囲まれており、その一つが所蔵者の「弱体」化である。所蔵者の「弱体」化とは、文献史料の所蔵者が、文字の判読ができないために史料の内容（重要さ・貴重さ）がわからないことや、世代交代に伴い先祖伝来の文献史料の所蔵を維持できなくなる、などのような事態にいたる事をさす。所蔵者が伝来史料を維持できなくなったとき古書業者などへ転売などはまだモノとしての史料が残るだけ良いという見方もあるが、焼却や廃棄などのような取り返しのつかない事態も時に発生する。

また災害や、虫獣損・湿損のような自然的要因や、盗難や戦災など人的要因など、文献史料消滅の原因は数知れない。さらに研究者による持ち出

しも見逃せない要因である。網野善彦『古文書返却の旅』（中公新書、1999年）は、研究者による不用意で無計画な史料の持ち出しが、借用の長期化、返却が著しい遅延をもたらし、そのことが地域から文献史料を奪うに等しい行為であることを具体的に示して見せた。こうした滅失の危機からいかに文献史料の保全を図るかは、研究者だけでなく地域住民を含めた関係者が密接に連携して取り組んで行かねばならない。そうすることで、文献史料を地域の中で地域の人々が主体となって保存し、そして活用を行なっていくことにも繋がる。

(3) 10/19 松下正和（文学部助手）「災害と地域史料」

1995年発生の阪神・淡路大震災で被災した歴史資料を保全するボランティア団体として成立し、講演者が事務局長をつとめる歴史資料ネットワークの活動を通じて、①災害から地域の歴史遺産を守る取組の意義、②被災史料保全活動をめぐる現状と課題、③史料保全と歴史学について講義を行った。

①災害から地域の歴史遺産を守る

大震災直後の被災歴史資料保全活動の際に、多くの史料の廃棄が見られたこと、研究者の側が想定する「歴史資料」と市民とのそれにはずれがあることが明らかとなり、改めて市民の歴史認識が浮き彫りとなった。その背景には、博物館に展示され教科書に記述されている事象や、とりわけ古いもののみを「歴史」「歴史資料」とする認識があった。しかし、近年指定文化財だけではなく、広い意味で景観やまちなみなど空間的なものや、地域の核として認識されているようなものも含めて地域の遺産とし、災害時にはそれらも含め保全すべきとする発想が登場してきた。地域の歴史遺産を保全することは、地域住民自身による地域社会の再認識とコミュニティの継承になる。また、地域社会が過去の災害にどのように対応してきたのかという記録と記憶の継承―「災害文化」の継承は、持続的なコミュニティの中でしか再生産されない。したがって、地域歴史遺産を大規模災害から守ることが、結果として大規模災害から地域を守ることへとつながる。

②被災資料保全活動をめぐる現状と課題

2004年台風23号による水損史料保全活動を例に、被災資料保全活動をめぐる現状と課題につい

て、史料の所蔵者・自治体・大学の視点から具体的に述べた。様々な災害へ対応するためにも「官」「学」「民」の垣根や専門・地域の枠を越えたネットワーク作りが重要である。

③史料保全と歴史学

地域から地域の住民とともにレスキューした史料は、そこ住まう地域住民により保全、活用されることが望ましい。史料ネットでは、それらの史料を地域住民とともに整理する中で新たな地域史像を作り上げてきた。歴史学を学び、地域の歴史遺産の保全・活用をはかることが、現代の地域社会の中でどのような意味を持ちうるのか。災害は必ず毎年のようにやってくる。史学科をもつ大学の役割のひとつとして、院生・研究者だけではなく、地域社会の中で様々な職業に就く一般の社会人になる学生も含め、上記の点を実践していく地域リーダーとして養成することが喫緊の課題なのである。

(4) 10/26 森田竜雄（文学部地域連携センター研究員）「水損史料の復元修復論」

まず、「はじめに」として、2004年の史料ネットによる台風23号の水損史料の救済活動と大量の史料救済の意義について、①ネットとして始めての風水害からの史料保全活動であること②広域的な地域を対象として、大量の水損史料の救出（及び修復）を行ったという、全国的にも希な事例であることを述べた。その上で、水損史料は、地震被災史料と異なり、災害による被災ののち、カビ、細菌による汚損・劣化が進行するという特有の問題があり、結果早急な修復（乾燥）措置が必要となることを指摘した。

続いて、台風23号による被災例を用いて、水損史料の救済・修復の実際を具体的に述べた。すなわち、日高町（現豊岡市日高町）浅倉地区T家及び出石町（現豊岡市出石町）H地区公民館所蔵史料につき、救出活動の実際や救出史料の概要を示した上で、その後の修復（乾燥）作業の具体的な手順を、学内での手作業による吸水・乾燥作業、文化財保存機関での乾燥機による真空凍結乾燥法に分け、スライドを使いながら段階を追って解説した。また、双方の措置を経て乾燥した史料を持ちこみ、乾燥状況を確認してもらった。

最後に、以上をふまえ、修復活動の問題点と成果について述べる予定であったが、時間的な都合

で十分に果たせなかった。ここでは話すべきであった内容を補って記す。まず、手作業による修復に関して、特に作業量の膨大さに関わって、多くのボランティアが必要となり、それをまとめる修復と古文書に関する知識の両方を兼ね備えたボランティアリーダーが不可欠となること、よってそうした人材の養成が望まれること。また、真空凍結乾燥に関して、大型の真空乾燥機を持つ機関は限られるため、機関の確保が大きな問題となり、その点で、県内・近畿レベルでの文化財保存機関との連携の元に修復を行った今回の事例は、今後大規模な水損史料が発生した場合の参照例たりうること。そこから、今後に備える意味で、研究機関や文化財保存機関のネットワークを事前に構築する必要があること、以上である。

(5) 11/2 佐々木和子（文学部地域連携センター研究員）「現代史料保存活用論（震災資料）」

今回の課題は、現代史の資料がどのように生成し、保存されていくかである。その具体例として、1995年1月におこった阪神・淡路大震災での資料保存をとりあげる。

この震災では、直後から記録を保存したい、体験を継承したいという意識が幅広く存在していた。膨大な体験記・や記録、報告書が大量に作成された。また、記録保存活動をおこなう民間のボランティアグループが立ち上がり、図書館関係者、資料館関係者有志によるネットワークが形成された。神戸大学附属図書館をはじめ、図書館も従来収集対象としていた図書以外のビラ・チラシ・メモ類といった一次資料の保存を呼びかけた。兵庫県は、財) 21世紀ひょうご創造協会に委託し、震災関連記録の収集・保存を震災復興計画の一環に組み込むなど、さまざまところで始まった。現在、主な保存機関は、人と防災未来センター資料室（行政）、神戸大学附属図書館震災文庫（図書館）、震災・まちのアーカイブ（ボランティア団体）、人・街・ながた震災資料室（ボランティア団体）などがある。

では、何を震災資料というか。兵庫県の委託を受けた財) 21世紀ひょうご創造協会（1998年からは阪神・淡路大震災記念協会）は、次のような内容を含むものをその収集対象とした。すなわち、
1、今回の地震の実態 2、地震被害の実態
3、地震への対応の実態 4、被災者の生活実態

5、復興計画・事業の経過などを示す資料・記録類 である。資料形態は、情報媒体の多様化に伴い、紙資料（ビラ・ちらし、メモ、冊子、壁新聞）、図書、一般刊行物、CD-ROM、写真、ビデオなど多種多様なものがその対象となった。つまり、震災に関連するものはすべて、震災資料としたとも言える。

震災資料は、歴史資料と異なり、同時代の資料であり、資料収集のときに、公開基準を提示する必要があった。つまり、どのような形で公開されるか、利用されるかを明示することが求められたのである。兵庫県や神戸市などの情報公開条例を参考に、プライバシー情報へ配慮した公開基準がつくられたのである。

(6) 11/9 石川道子（文学部地域連携センター研究員）「地域歴史文化と企業」

テーマの概要：かつて伊丹郷と称された地域（現在の伊丹の中心市街地）と、伊丹郷において展開された江戸積み酒造業、および現在の酒造会社と地域の関わりについて、近世初期から江戸積み酒造業において一地域を形成した伊丹郷のなかで、当時から現在に至るまで酒造業を行い、膨大な史料を残された小西家の「小西新右衛門氏文書」を中心として、近世の江戸積み酒造業と、酒造業が周辺地域に及ぼした経済効果等を見、明治以降の酒造業の沈滞と、それに対応する近代産業への取り組み、次に現在小西酒造が伊丹のなかで取り組んでいる文化活動をみた。

小西家は江戸積み酒造家であると同時に、近世後期およそ10000人、2500軒を有した伊丹郷の町政の頂点に立つ惣宿老の1人として存続した。

当時、江戸積み酒造業は地域の大産業と位置づけられ、時代によって異なるが、およそ40～50軒の江戸積み酒造業者は伊丹酒家仲間を組織し、自郷・他郷との酒造調整に当たった。一方、有力酒家は酒造業のみでなく、伊丹郷において牽引車的な役割を担っていた。凶作時の施行や防火・防犯の取り締まり、また軽犯罪者の処罰等については領主の権限を代行するなど、町の自治の中心にいたのが酒家の当主が就任した惣宿老である。

酒造家が伊丹郷の経済・町政を支える中心となったことはもちろんであるが、米踏み等酒造関係の労働者を出す周辺農村に与えた影響も大きい。

明治を迎え新しい酒造法が打ち出されると新規参入者が乱立し、近世酒造家の多くは衰退していった。このような中で小西家は酒造業を続け、一方では小学校の設立、鉄道の敷設等、公益性の高い事業を手がけている。

現在種々の企業が進出し、かつて地域の大企業であった酒造業も相対的に規模が小さくなったが、400年余という長期間、伊丹と共存してきた酒造会社に何かを期待する市民も多い。

「小西新右衛門氏文書」の調査によって明らかになった史料に基づき、現在の酒造技術者と協力して元禄15年の寒酒を造り、以来販売しているが、このような企画は個人では到底できないことであり、これまで企業とは全く別の次元で行っていた史料調査が活かされた例である。また、小西酒造が運営している白雪長寿蔵ミュージアムは近世後期の酒蔵を改装した建物で、ここで月1回もたれている講演会「伊丹歴史探訪」は阪神・淡路大震災の年以來10年続き、今年4月には101回を迎える。

「まちづくり」がさかんに論じられる現今、様々な取り組みや方法があるであろうが、長年月地域とともに歴史を刻んできた企業の活動はまちづくりにおいても大きな存在となっている。

(7)11/16 大国正美（神戸深江生活文化史料館副館長）「地域アーキビスト養成論」

神戸深江生活文化史料館の成り立ちは、明治22年（1889）から昭和25年（1950）まで存続した本庄村（神戸市東灘区深江・青木・西青木）の地域史編纂のために集まった史料を展示するために、地元の財産区が設置したもので、1981年2月に83平方メートルの史料室としてオープン。1983年11月270平方メートルの史料館に拡張した。これまでに『本庄村史』資料編第1-3巻、『本庄村史』地理編・民俗編刊行した。有償ボランティアで運営し、土日のみ開館するユニークな史料館として運営している。類似施設が神戸市北区有野、西宮市山口町など近辺でも相次いで登場している。

民間の史料を民間で保全する試みだが、その意義を考えるには戦後の史料保存運動の展開を踏まえる必要がある。戦後の史料保存は4期に分けられ、第1期（1945-59年）は、史料の発掘と史料散逸の防止に主眼が置かれた時期であった。

第2期（1959-75年）には、これを踏まえて文

書館設立運動が始まり、現地保存主義が確立された。第3期（1975-87年）は史料保存・文書館の方向性の論議が深まり、歴史学からの自立が進んだ。しかしここでは、文書館は公文書に重点を置くよう運動の方向が次第に変更されていった。第4期（1987-現在）は、公文書館法成立以降だが、文書館建設は景気動向に左右されている。

文書館法成立以降、民間史料の保存をめぐる問題点がクローズアップされてきた。それは法律条文の「公文書等」の「等」には私文書、古文書も含むが、それを補完する資料としてしか位置づけていない点である。「地域文書館論」を唱え、民間所在史料の保全に積極的な資料館もあるが、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）の原則は、「自らの文書を、自らのために、自ら保存する＝親機関論の史料保存」論であり、単独館信仰が強い。この点については民間所在の史料保存へ不十分という批判がある。ただ震災での史料の散逸を経験し方向性の修正が行われている。

しかし、新たな課題として、電子化の推進・自治体合併による行政文書の散逸と指定管理者制度の導入がある。指定管理者制度は民間に公共施設運営を委託するもので、急激に進んでいる。しかし、委託期間が3年程度と短く長期的な視点で調査を行うには問題点が多い。これまで全史料協は博物館や文書館と役割分担を行うことによって、文書館は公文書に重点を置くという「ネットワーク論」を構想していたが、この構想が崩壊する恐れがある。

こうした中では、史料の「現地利用主義」、すなわち、史料を現地が利用する、現地に分かるように地域に届く手段で利用することが重要である。

また登録制度の拡大も必要である。自治体では登録制度をすでに導入しているところもあるが、

対象を限定して補助金を出す件数は多くない京都府・京都市の例と、悉皆登録化の新潟県、武蔵野市などの例がある。当然後者を目指すべきで、担い手として「在野アーキビスト」の養成が必要である。安藤正人氏は、文書作成主体ごとに文書館を設ける草の根文書館を提唱しているが、施設もさることながら、人材こそ育成していくべきで、市民参加の史料保存を推進するために、研究者も積極関与が必要だが、必ずしも関心は高いとはいえず、大きな課題が残っている。

(8)11/30 辻川敦（尼崎市立地域研究史料館課長補佐）「地域史料館論」

講義においては、配布資料にもとづき以下の4項目にわけて説明を行なった。

1 文書館・公文書館とは？ 受講者が文書館・公文書館についてかならずしも明確な知識やイメージを持っていない場合もあるとの前提にたって、公文書館法や『文書館用語集』などの基本文献における文書館の定義等を説明した。

2 文書館業務の実際 地域における文書館事業の実際について、尼崎市立地域研究史料館の事例をもとに、施設の概要と日々の仕事の様子、史料調査・収集・整理および市民への利用・公開、市民・団体・研究機関との協働の取り組み等について、具体的に紹介した。

3 文書館概論 『アーカイブ事典』（大西愛ほか編著、大阪大学出版会、2003年）の目次を紹介し、そこに取り上げられている項目のうち、自治体文書館事業の根幹をなすところの歴史的行政文書選別・収集・保存について、考え方や実務の概要等の解説を行なった。これ以外の項目については、概論を理解するうえではどのような内容を学習する必要があるのか例示するにとどめた。

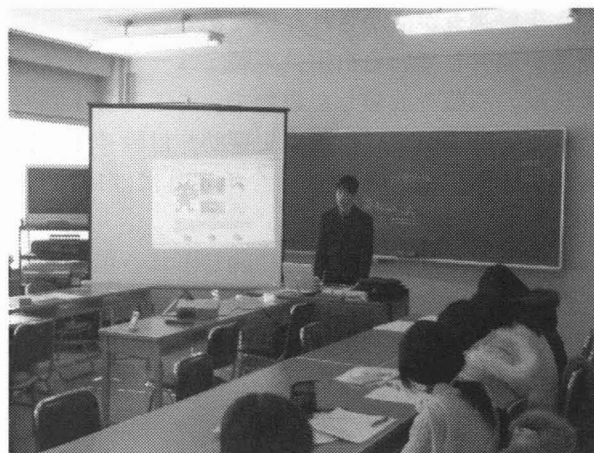
4 文書館事業の社会的位置・役割 尼崎市立地域研究史料館の事業経験をもとに、事業を構築・実施していくうえでは市民サービスの視点が重要であること、市民は利用者であるとともに、館の利用を通して理解者・協力者となってくれる存在であり、そういった市民のボランティア協力や、まちづくりなどに取り組み歴史を活かす市民団体等とのネットワークづくりが事業推進のうえでは欠かせないこと、そこから具体的にあきらかとなる職員の専門性などについて解説した。

(9)12/7 村井良介（文学部地域連携センター研究員）「新しい史料活用と人的ネットワーク論」

主として尼崎市富松における連携事業の取り組みから、新しい史料活用と人的ネットワークについて論じた。

web上の仮想博物館である「富松城歴史博物館」の事例を紹介。発信者と受信者という壁を崩す可能性、多様な参加形態など双方向性を活かした様々な可能性とともに、定期的な更新・維持管理の難しさなどの課題を説明した。

これに続いてこうした可能性や課題の理論的な背景をどう考えるべきかを論じた。そもそも史料とは何か、あるいは地域とは何かと考えたとき、それは課題によってとらえ方が変化する。特定の歴史像を正史として提示し、地域アイデンティティを立ち上げてしまうことは、排除と同一化という二つの危険性を持つ。したがって多様な関心、多様な課題に対し開かれた連帯が模索されるべきであり、そうしたことが可能になるような開かれた人的ネットワークが生み出されることが重要であるとした。同時に、情報を発信する際には、どのような課題に基づいて何を選択し、何を選択しなかったのか、それは誰のために、何のためにであるかといった自覚が必要であることを述べた。



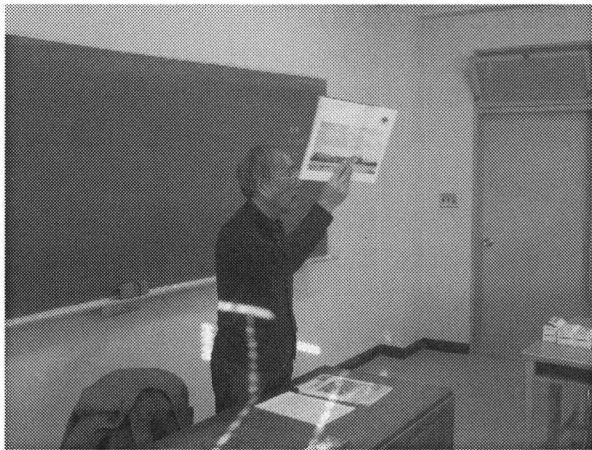
(10)12/14 大村敬通（小野市立好古館館長）
「地域博物館の活性化と地域との連携」

小野市立好古館（歴史博物館）は平成2年の秋、江戸時代の一柳藩（1万石）と鎌倉時代に東大寺大仏の再建に当たり、重源によって浄土寺浄土堂が建立され今日まで連綿と引き継がれ、市民さらに日本の各地から訪問される所です。この2つを中心に小野市の歴史を紹介する小さな博物館である。

開館から平成13年度末までの入館者は、平均6千人で人口5万人の約12%前後であったが、地方の時代と言われる中で、小野好古館の役割は如何にあるべきかが問われているのが、好古館の問題であった。

今までの好古館は、受け身で地域と遊離し、広報活動への認識不足等から脱皮した好古館へと歩む事によって、好古館への理解が深まり親しみを持って気軽に来館して頂ける方針に立って、平成

14年度から新たに出発する事が最重要課題であった。



そこで、地域博物館の役割を具体的に形として表すため、好古館と地域の住民が一带となった地域展を平成14年度から取り組む事にした。

この取り組みでは、ある一つの町を取り上げ、町の歴史を町の小学生と中学生が自分達で自分が住んでいる町を、親やお祖父さん、お婆さん、また町の高齢者の方々を尋ねて聞き取り、まとめた資料を好古館に展示する事であった。また親は、子供が調べた資料の補強資料（古文書・絵図等）を展示する事でもあった。

さらに、学校とも連携した学社融合事業にどの様にして取り組んで入ったか等についてこの授業で理解して頂けるように、講義するものである。

(11)12/21 坂江渉（文学部地域連携センター研究員）「地域の中の歴史的・自然的遺産の『発見』と活用」

神戸～播磨灘の海岸線一帯は、昔からウミガメの上陸・産卵地であった。2005年の夏も明石市の松江海岸の砂浜で、5年ぶりのアカウミガメの産卵・ふ化がみられた。講義ではこのウミガメの産卵という自然現象の社会文化史的な側面にスポットをあて、地域における歴史的・自然的遺産の保存・活用について考えた。

(12)2006年1/11 足立裕司（工学部教授）「地域歴史遺産としての建築物」

(13)1/18 市沢哲（文学部助教授）「まとめはじめに」

最終回の講義は本来「まとめ」を行うべきでは

あるが、地域歴史遺産の保全と活用の舞台である「地域」はそれぞれに固有の個性を持っており、どこにでも通用する「具体的な」処方箋などない。そもそもこの講義が成り立つ基礎には、文学部地域連携センターの地域連携活動があった。私自身はこの活動に5年携わって、それぞれの局面で「よかった」と思ったこと、「どうにかならないか」と思ったことを突き詰めていくことが、当面大切だと思っている。但し、思ったことを突き詰めた先には、「現代社会の問題」として一般化できる問題が必ずあるはずである。そこで、今回の講義では、活動経験の中から、これだけは今後自分が活動していく上で心にとどめておきたい、と思っているいくつかの問題を提示する。以下、私がはじめて携わった尼崎市富松地区の活動（村井講義参照）をナビゲーターとして、話を進める。

（1）連携活動の意義はどこにあるのか？

連携活動をして最初に思い至ったのは、市民にとって自治体や大学は「疎遠な」存在であるということであった。市民は大学や自治体にどんな人材がいて、自分たちとどういう協働が実現できるかということをほとんど知らない。一方大学は、市民の大学に対するニーズや市民の能動性、ポテンシャルについてほとんど知らない。このような状態が通常だとすれば、連携活動は三者が互いに互いの潜在的な能力を引き出しあい、高めあいながら活動するところにおおきなメリットがある。また、このことは同時に、三者はそれぞれ独自の役割（他が代替できない役割）を持っていることを教えてくれる。連携するそれぞれが、基礎的な力をきちんと持っておかねばならない。そうでなければ、連携は実りあるものにならない。指定管理者などもってのほかである。

（2）博物館学は誰に向けて開講されるのか？

富松でバーチャル博物館が完成したときに、委員会のリーダーから「博物館学を受講しているような気分だった」という感想をきいた。その時に、現行の博物館学の落とし穴に気づかされた。博物館学は通常学芸員資格の授業として位置づけられている。大学には社会人として博物館や文書館を活用するサポートすることを学ぶ「博物館学」がない。現在の博物館・文書館の存在を脅かす「利用者がいない」という問題の根には、利用者教育が十分なされていないという事実があるの

ではないだろうか。さらに、学校教育の中での博物館・文書館の利用のされ方に問題がある。ひどい場合は、引率の先生が学芸員に生徒を丸投げし、教員自身が博物館の利用方法や楽しさを示さない（親も同じか）。家庭や学校といった基礎的単位が、博物館を使いこなせるようにならないと、文化施設はますます窮地に立たされ、文化的土壌も痩せ細るのではないだろうか。

（３）連携活動成功の鍵はどこにあるのか？

富松の活動が成果を収めたのは、いろんな人脈で適切な人材を探り当て、地域に引きずり込む、ジェネラリスト的な地域リーダーの存在であった。他の地域での活動でも痛感したことであるが、リーダーのあり方が、その地域の文化に大きな影響を与える。リーダーの育成は（大学にとって）とても重要な問題である。同時に、リーダーのあり方も含めて、われわれ自身が活動する地域社会について、その特色を十分に理解しておかねばならないということも学んだ。あたりまえのことかも知れないが、どこの地域でも歴史文化というものが同じような価値を持つものとして、土地の人々に受け止められているはずというような、自分に都合のよい予断がないか、常に点検が必要である。あったのではないかなと思う。

（４）むすびにかえて

受講生の皆さんは、一連の講義をどういう立場から聞いたか自己点検してもらいたい。特に、専門職を目指す立場、社会人として地域文化を支える立場など、立場はいろいろであるが、地域歴史遺産の保全活用が自分の問題としてリアリティを感じることができたかはとくに重要である。講義の意図は、専門職も社会人も自分の立場から連携活動できる人を育成することにある。この点から、自己点検と授業の評価をしてほしい。

《受講生へのレポート課題》

2005年の1月18日に最後の講義を終え、受講生に以下のようなレポートを課した。

□A4版横書き、40字×40行。締め切り2月3日金16:00。文学部教務係へ提出。

□(1) 地域歴史遺産の保全・活用のあり方に関して、半期間のリレー講義全体を通じて学びとった点、感じ取った点、(2) その中でとくに個別のテーマを選び、それに対する自分自身の意見や考え方について、合わせて約1200

字程度で述べよ。

《反省点と今後の課題》

受講生の受けとめ方としては、おおむね本講義を評価する意見が多く、また全体の主旨やねらいを理解できた学生が少なくなかったように思われる。

レポートの中でも、「この講義は歴史遺産に対する新たな認識を私に与えてくれた」、「今まで習ってきた、あるいは今後習うであろう歴史は、数ある地域史を代表し、もしくは平均化して考えられたものだ、という事に気づくことが出来て、私にとって非常に有意義な授業であった」、「歴史研究者にとっての史料ではなく、地域住民にとってのその地域独自の歴史を示すものの意味を、研究者側が寄り添って考えるべきであると思う」、「私がこの講義で新鮮に感じたことは、地域の人々は選択をしているという事である。何を課題として選択するか、そして選択されなかったものにも留意する必要がある、という事が印象に残った」などの感想が出された。

他方、疑問点（問題点）や今後の要望点としては、「それぞれの講義はどれも1時間ですべて学び取れるようなものでなく、2～3時間かけて理解するような内容だった」、「今回の講義を聴講した学生の立場は、大学と地域が共同して実施している各種活動のお話をただ座って聞くという以上のものではなかった。学生に対する期待や役割について語られた講師は一人もいなかったように思う」、「聞いた話は、紆余曲折しながらも最終的には地域史料が活用され得るというサクセスストーリーだったが、特殊な例に聞こえてならなかった。はたしてすべての地域で今後同じような成功が見込めるのであろうか。これは講義した側にとってみれば、そういった成功に導く後継者育成が当初から意図されており、結局、彼ら次第であるという話になってしまうかも知れないが、育成の観点からすれば不十分だったと思う」などの回答がみられた。

このうち「時間不足」や「サクセスストーリー云々」の問題は、すでに担当した講師陣の中からも出されていた点であり、今後、こうした問題点を踏まえながら、授業内容をよりよい方向に改善していくことが望まれるだろう。

（文責＜講義内容の概要文を除く＞・坂江渉）

演習・実習

古文書合宿

現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダー養成事業」の一環として文書合宿を開催した。

なお、9月2日、合宿の事前準備のため今年はいじめて、合宿に参加する学部生・院生を中心に、古文書の解読ならびに古文書調査の手順・留意事項などについて集中講義をもった。

テキストは古文書室の長浜家文書・御影村文書等のなかから、古文書の調査等でよく目にする証文類や年貢免状を用いた。講義は午前午後に分け、午前中の講義は、古文書をはじめて目にする初心者を対象として、まず崩し字に慣れるよう、文字・内容ともに初歩的な金子借用証文をテキストとした。午後は初心者も合同で、宗旨手形・人別受取一札・御影村年貢免状等の文字・内容を解読した。文書調査に当たる上で最低限の史料の種類であり、これより少なくすることもむつかしいと思われるが、一回の集中講義でやるには少し時間が足りなかったという反省がある。

古文書合宿事前講義

日時 9月2日11時～12時20分（1回生のための入門講座）、13時20分～17時

授業名 地域歴史遺産保全活用基礎学習（学部）

日本社会文化論（修士）

参加者 39名

内訳 修士（8名）、4回生（6名）、3回生（6名）、2回中（6名）、1回中（5名）、東洋史（3名）、地理学（1名）、国文学（1名）、西洋史（1名）、総合人間科学科（1名）

テキスト○文学部古文書室蔵 長浜家文書・御影村文書・「古文書手習い」（柏書房）から借用銀証文、宗旨手形、村人別請状、往来手形、年貢免定、皆済目録、俚約触等、主に一般的かつ書式が定型化された史料を使用

○【古文書整理の手順について】と題して合宿に向けて、史料取扱の注意事項、目録作成の手順等を示したプリント

講師 森田・石川

古文書合宿

場所 神戸市西区伊川谷町前開270の1 太山寺
なでしこの湯（保養センター太山寺）

日時 9月5日13時～21時（夕食1時間含む）。高橋先生挨拶、奥村先生趣旨説明
9月6日9時～21時30分（昼・夕食各1時間含。21時より感想・反省会、奥村先生総括、解散）

なお、当初の予定は9月7日までであったが、台風のため予定を変更して6日に終了した。

参加費用 宿泊代15000円／1人

授業名 博物館実習事後実習（学芸員資格取得希望者）

地域歴史遺産保全活用実習（学部生）

日本地域文化論特殊研究（修士）

参加者 56名（内、宿泊54名）学部生・修士・総合人間科学研究科院生・文化科学研究科院生・講師・教員

作業 大学所蔵文書（摂津国馬郡名塩村野条家文書・武庫郡常吉村田口家文書・摂津国川辺郡山本村文書）の目録カードの作成

作業の手順として、1日目は参加者を6グループに班分け、講師による各文書についての紹介、作業開始。2日目は班ごとに作業続行、なお、台風のため予定を変更してこの日に作業を終了することとなり21時30分に解散。

目録カードを取った史料の点数、カード記載内容内容、未調査の残史料等についてはこれから確認したい。

（3班の作業内容：担当）

3班は4班とともに常吉村（尼崎市）田口家文書を担当した。史料は近世文書を中心とし、これに近代文書（地券）・氏子札等が1

箱に収まっていた。18世紀以来の武庫川の水利関係文書、武庫川出水絵図・村絵図数点が含まれる良質の史料である。未調査に終わった若干の史料については後日完了したいと思っている。

3班参加者に史料調査についての簡単な感想文を書いていただき、以下のような内容に集約できるかと思う。

○調査史料の内容 武庫川の用水をめぐる
争論関係文書・借用証文・地券・出雲大社
造営勧化物寄進手続き書・借家契約状・人
別請け状・水利絵図・朝鮮人参府道程記
録、等。

○総じて今回の古文書合宿では古い時期の文
書が整理できたのがよかった。これまで参
加した古文書合宿では、近代文書の整理が
多かったが、今回は古文書らしい古文書が
多く、解説のよい訓練になった。

○文字がなかなか読めない、あるいは初参加の
去年よりもよく読めるようになっていたの
で嬉しかった。目録をとることが難しい。

(文責・石川道子)

生野古文書合宿

はじめに

本年度も昨年度に引き続き、2006年2月18・19日(土・日)の2日間にわたって大学院生による古文書合宿を行った(於生野書院)。合宿には、大学教員3名・大学院生(19日から途中参加した者も含む)16名が参加した。

昨年度に引き続き生野書院所蔵文書(以下、書院文書)の整理をメインとしたが、19日には合宿にあわせて「生野書院文書をまもる・活かす」と題した市民向けの企画も同時開催した。この企画は、大学院生による整理作業風景の公開とともに、古文書講座、書院文書の研究報告の場を設けることにより、書院文書の整理の意義を市民の方々に広く伝えることを意図したものである。新たな試みとして行ったものであるが、前例が無かっただけに課題も多く残った。以下、順に報告していきたい。

(1) 生野書院文書の整理作業について

生野書院文書の大半についてはすでに目録が存在していたが、その目録は数十点の文書が一項目に記載されるなど、不備も多く、文書の保存はもちろん、公開・活用には適さないものであった。かかる目録の不備を訂正するために行われたのが昨年度の再整理事業であり、同事業によって以前目録化されていた古文書については作業が終了した。

しかし、再整理事業において土台とした上記目録自体、書院文書の全体像を反映したものではなく、書院の収蔵庫には全くの未整理のまま保管されている文書もあった。かかる文書の整理を行うのが今回の合宿の目的であった。

なお、合宿に備えて事前に収蔵庫の調査を行ったところ、A木箱に入った未整理の一括文書を確認したほか、B鉾山の坑道絵図、C刊本の類も未整理であることが判明した。さらに収蔵庫にはD大きな行李があり、そこには近世から近代にかけての文書が納められていた。これも全く未整理の状態であった。

さしあたって合宿ではA～Cの整理作業を行った。Dについては分量が多く、合宿中では整理を終えることができないと判断したため、今回の整理作業からは見送った。

作業スケジュールは以下の通りである。

■18日

13:00 古文書整理開始
18:00～19:00 夕食
19:00 整理作業再開
20:30 整理作業終了

■19日

9:30 古文書整理作業開始
12:00～13:00 昼食
13:00 整理作業再開
古文書講座・研究報告等企画開催
15:45 整理作業終了 後片付け

かかる整理作業は、町民の方への公開を前提として行なった。それは第一に、地元の方々に直接見ていただくことで、大学で行っている事業への理解を深めていただきたいと考えたためであり、第二に、地元の方々との交流を通して大学院生にも改めて作業の意義を認識・確認してもらおうと考えたためである。また、そのような過程におい

て、地元の方から史料所在情報の提供、あるいは地元の方・大学院生ともに生野の歴史についての理解を深めるということが実践的に行われることを期待した。

そのため事前に町民の方に対しては参考資料(199頁)に掲げたチラシを配布し、当日大学院生が整理作業を行うこと、整理作業にもぜひ参加いただきたいことなど告知を行った。しかし想定していたほど参加者は集まらず、昨年度の整理作業参加者1名に、本年度も18・19両日とも参加いただくことができただけであった。後述の古文書講座・研究報告の参加者についても、講座ののちに作業風景を見学されていたが、見学時間も10分ほどにすぎず、地元の方と大学院生との交流の場として実現・機能させるまでにはいたっていない。

整理作業自体は順調に進み、予定分については全て終了したが、それは大学院生が機械的に作業を行うよりほかなかったからにすぎない。

今回の合宿では、通常の古文書合宿や研究室旅行などで行われるような、生野の歴史に関する勉強会、あるいは生野の町の巡見なども行わなかったため、参加した大学院生が生野に関する知識を広げる機会をもつことが全くできなかった。また今回の合宿は、「地域リーダー養成」のための教育の場でもあったが、それについてもほとんど実践しえていない。

今にして考えれば、19日に行ったイベント(古文書講座・研究報告)に大学院生が参加したり、あるいはかかるイベントの準備会を設けて大学院生どうしの意見交換をはかったり、といろいろな方法があった。このように地元へ歴史研究の成果をどのように還元してゆくのか、その方法論を学ぶ素材は多くあったにも関わらず、そうした素材を活かしきれなかった点が、今回の反省点のひとつである。

(2) 19日の企画について

19日の企画は、前述したように、古文書整理作業がいかんに行われているのか、また整理を行うことによりどのような成果が得られるのか、そのような一連の流れを地元の方々に伝えることをねらいとしている。企画段階では、古文書整理作業の見学⇒昨年度の再整理事業の成果・研究報告会への参加という流れを想定していたが、この間生野で行っていた初心者向け古文書講座の受講者

にも整理作業風景を見学していただこうと、古文書講座も同日に開催した。

研究報告については、添田仁氏(神戸大学文化学研究科大学院生)にお願いした。当日の研究報告の様子や感想などについては、同氏の報告を参照いただきたい。

さて、当日は、古文書講座と研究報告は同時に別室での開催を考えていたが、古文書講座の参加者が予想以上に多かったこと、受講者の方々も研究報告を楽しみにされているということもあり、古文書講座の時間を予定より短縮し、その後に研究報告を行うこととした。古文書講座・研究報告とも30名ほどの人数があつまり、研究報告は盛況であった。講座・研究報告ともに整理作業の重要性と、その意義を訴えたうえで、見学をうながしたこともあり、報告会ののちは、参加者の多くが整理作業現場に赴き、作業の様子を見学していた。なかには大学院生に熱心に質問される方もいらっしやしたが、一緒に作業に参加されるまでにはいたらなかった。

今回の企画に取り組んだことで、町民の方々にとって古文書の講座を受けること・研究報告を聞くことと古文書の整理作業に自ら加わるものの間には若干の隔たりがあるように感じられた。両者の有機的なつながりがあること、整理作業は町民の方々が取り組むことによって意味をもつものであることなどをもっとアピールすべきであったように思う。

もともと、無意識のうちに町民の方々をこうした企画の一方的な「受け手」として想定していた感もある。克服すべき今後の課題である。

おわりに

今回の合宿については、冒頭に述べたように新たな試みということもあり、手探り状態での実施であった。特に19日に関しては、一方で大学院生の整理作業の進捗を気にかけながら、他方で古文書講座を受け持つというかたちになってしまったため、自らが手一杯の余裕の無い状態となってしまった。事前の綿密な準備とともに、大学院生との分業をもう少しうまく設定しておけばよかったと思う。

このような反省点・問題点をふまえて、来年度古文書合宿では、大学院生に対しては、一緒に企画・計画を練る、あるいは生野の歴史について学

習する機会などももてるよう配慮したいと思う。さらに、来年度に関しては、大学院生を相手とした古文書講座の「模擬授業」を行い、古文書の教え方などについて議論を持つ場を設けるなど、「地域リーダー」養成という側面において意義ある合宿となるよう、企画を練ってゆくことにしたい。

町民の方々に対しても、企画の段階から参加いただく機会を設けていく必要があろう。いまだ手探り状態ではあるが、今後もひとつひとつ課題を克服すべく、取り組んでゆきたいと思う。

(文責・河野未央)

生野古文書講演会を担当して

平成18年2月19日、生野書院において行われた古文書講習・講演会のうち、「天誅組の変と生野」と題した地元住民向けの講演を担当した。これは、昨年度に実施した生野書院所蔵文書の整理作業によって明らかになった史実を地元住民に還元し、地域史料の保存と活用の意義を具体的に示すことを目的になされたものである。

講演の内容は、近世生野の掛屋藤本屋の記録である「御用留日記」(生野町指定文化財)から幕末大和天誅組の変に関する記述を抽出し、その記述から判明する大和五条代官所と生野代官所との関係、掛屋と代官所役人との関係、当時の生野住民の情報収集能力等についてまとめたものとなった。講演では、天誅組の変や使用した資料の解説、また資料の原文や翻刻文を合わせて掲載したパンフレットを配布して、聴講者の理解を深めようと努めた。参加者は20名余を得た。

以下、この講演会ならびに地元住民との接触のなかで考えた問題点を記しておく。

1点目は、参加者に様々なレベル・タイプの方が混在し、どのレベル・タイプに照準を合わせた講演をすればいいのか、決めかねたことである。古文書講習会などでは、どの場合も同じであろうが、今回生野で参加していただいた方々も、大まかに三つのタイプに分けられた。それは、①これまで地元の勉強会などで学び、すでに古文書を読むことができ、また地元の歴史にも詳しい方、②古文書を読めるようになりたい方、③古文書はともかく、地元の歴史を勉強したい方、である。①

は地元の郷土史家の方々、②と③は初心者である。

これらのレベル・タイプに分けた講演を行うのか、それとも一律のものでよいのか。今後、明確にしていく必要がある。



2点目は、生野書院所蔵文書の整理・保存というところから、史料の翻刻・解説、そして史実として浮かび上がるまでの一連の過程を地元住民に理解してもらうことができなかったことである。これは、1点目の問題とも関連して、使用する史料のレベルをどこに合わせればよいのか明確でないため、結局は古文書の翻刻・解説という作業をこちらがすべてやってしまった上での講演となってしまったことに起因する。この意味で、今回の講演会は、別室で行った大学院生・地元住民による古文書整理や河野未央氏による古文書講習会と、内容的に断絶したものとなってしまった。住民個々が、われわれの支援のもと、自ら翻刻・解説した史料から史実を立ち上げていき、その作業のなかで、史料を保存・整理することの意義をあらためて理解する、といった一連のつながりをもった講演にする必要があったように思う。

3点目は、地元住民の内部で連絡・交流などの関係が構築されていない点である。これも、1点目の問題と関連して、タイプ①のみグループ化し

ており、①と②・③との連絡・交流のみならず、①と市役所・生野書院などの公的機関との連絡・連携がうまくいっていないことに起因している。大学は、（ある特定の）地元住民を指導するのではなく、公的機関とも協力しながら、あくまで地元住民の総体が主体となって起こした活動を支援する立場にすぎない。今後、①が中心となって、それぞれのレベル・タイプの方々と連絡・連携し、地元住民が総体として恒常的に活動しうる勉強会の体制作りを推進していく必要がある。以上、雑駁ながら、自身への反省も踏まえて問題点を述べてみた。なお「地域」の多様性に起因する課題は多く残されている。

（文責・添田仁）

小野市立好古館での博物館実習

歴史文化を活用し新たな地域づくりに資する人材（地域リーダー）の育成をめざす教育プログラム開発の一貫として、小野市立好古館で博物館実習が行われた。小野市と神戸大学は、社会文化にかかわる連携事業をすすめるための包括協定を結んでおり、小野市立好古館と連携して特別展「青野原俘虜収容所の世界～河合地区の近世・近代から現代～」を共同で企画し制作した。今年度の博物館実習では、従来の博物館実習の形態とは異なり、数日間連続して実習を実施することはせず、「歴史調べ」、特別展開会式、音楽会、講演会の運営補助など、特別展の準備から運営までの一連の制作過程を経験してもらった。これは、博物館の展示ができるまでや運営の実態を知るという意味で非常に実践的な実習となった。

また、「歴史調べ」への参加は、地域の人々と共同で調査研究を行い、それを地域づくりに活かしていく方法をともに考えるという意味で重要であった。なぜなら、今年度の博物館実習は、地域に生きる市民として、地域の歴史文化を支える人材を育成することをひとつの目的としていたからである。

今年度博物館実習として参加した学生の感想文（抜粋）をここに紹介する。

「小野市立好古館での博物館学実習」

神戸大学4回生 N. H

（前略）好古館での博物館学実習を経験して日本史学生として思うこと、それは自分自身が生まれ育った町の歴史を全く知らない自分が恥ずかしいということだ。私のように出身県のことは少しは知っていても、一番身近な町村のことになるとうか。小学生の頃に自分の町のことを知る機会がある小野市の子供たちが、とても羨ましく感じられた。自分の町のことを知りたい、そう強く思えるようになったのもこの実習のお陰である。実習生として好古館に行けて、大村館長の前向きな考え方に触れることができて、今までにない新しい体験をすることができて、本当によかったと思う。普通の博物館学実習以上の体験ができたとは私は確信している。きっと、大村館長のような地域リーダーが、今後小野市から誕生することだろう。

今年度は、初年度ということもあり試験的な性格もあったが、来年度以降より具体的・体系的に歴史系博物館実習のプログラム提示を目指す予定である。

（文責・人見佐知子）

第4回歴史文化をめぐる地域連携協議会参加感想

「第4回歴史文化をめぐる地域連携協議会」に参加して

深見貴成

参加して一番考えさせられたのは、様々な特色を持つ様々な自治体がある中で、自治体自身が歴史文化を活かすための不断的な努力を重ねていることがわかった反面、その経験を共有するのがいかに難しいかであった。小野市立好古館や香寺町史の試み、尼崎市立地域研究史料館の活動など、それぞれに工夫を重ねて市民との「インターフェース」を構築しているものの、それを自治体間で「インターフェース」の場がこの協議会以外にどれだけ持つことができるかが、問題になると思われる。実際、協議会の最後の質疑・討論においては、自治体と自治体、県と市町村など、必ずしも同じ地域歴史遺産を考えるのにも噛み合っていない部分があったのではないだろうか。

その意味では、コメントをされた久留島浩氏の

「地域社会＝新しい人と人との関係を作ること」
(久留島氏レジュメより) という指摘は、地域社会内はもちろんのこと、地域社会間にも当てはまるのではないだろうか。そのためには各自治体だけでは限界がある活動をさらに発展させるためのリーダーシップが必要になると思われる。それを誰が担うのかは私にはおおよそ判断がつかないが、少なくともこの協議会がその手がかりになったと思う。

第4回歴史文化をめぐる地域連携協議会傍聴記

正木 有美

報告を聞いていると多くの展示やイベントが行われ、一定数の参加者が集まっているようである。様々な取り組みの報告を聞きながら、参加人数が表しているものは何だろうかと考えた。「市民」は何を期待してこうした取り組みに参加し、何に満足し、何に不満を感じるのだろうか。そしてそのことにどれだけ自覚的なのだろうか。大抵のイベントではアンケートが配られるが、そこにどれだけの実情が書かれるのだろうかと疑問に思う。

私が史料を読んで「楽しい」と、「市民」が地域歴史遺産に触れて「楽しい」とはどのように違うのだろう。「市民」にとって地域歴史遺産に触れることは、それ自体が目的なのか、別の目的のための手段なのか。地域歴史遺産の活用とはどのようなことなのか。すでに議論されて自明のことなのかもしれないが、そのあたりのことに引っかかりを感じた。

そもそも、今回の協議会に参加していた博物館や町史編集室にとって、地域歴史遺産と市民とを結びつけることはどのような意味を持つのだろうか。活動を始めてしまえば参加者の数が成功と失敗を示す。しかしその成功にどのような意味があったのかということが本来重要なのではないだろうか。参加者が増えたことと、地域遺産が活用されていることを単純にイコールにしてよいのだろうか。参加者の増減を評価指数にしているように感じ、その点を疑問に思った。参加者が求めているものと、歴史学者が考える地域歴史遺産の活用にはどうしてもズレがあるだろう。そのズレに自

覚的でなければならないと思う。

第4回 歴史文化をめぐる地域連携協議会参加・傍聴レポート

八代醒ひとみ

今回の地域連携協議会のテーマは、「地域歴史遺産と市民を結ぶ新しいインターフェースの構築」であった。様々な地域から報告者を招いて情報交換する場として、貴重な機会であったと思う。活動の事例について知ること、いろんな人が自らの地域の歴史に興味・関心を持っていることが実感できた。しかし全ての人がそうではないはずで、課題も多い。地域歴史遺産を核とした地域づくりのためには、やはり「新しいインターフェース」の構築が急務なのだと実感した。

報告の中で、将来の展望についても述べられていった。私が子どもの頃、歴史に興味を持つきっかけの一つを与えてくれた兵庫県立歴史博物館も生まれかわるといふ。さらに、播磨町に建設予定である県立考古博物館の構想も示された。これだけ新しい事業が展開される機会というのは、そうあることではないと思う。県民が最大限活用できる博物館づくりのためには、ここが正念場であるといえるだろう。市民参加を実現し、インターフェースとして機能するためには、広報活動や人材の育成など、課題はたくさんあると思うので、自分の兵庫県民としての立場からいっても、何か関われないか考えたいと思った。

小野市や香寺町からは、実際に地域歴史遺産活用に携わっておられる方々が参加されていた。実際に活動しておられるだけに、現実的な悩みも提示された。細かい活動（ミクロ）の面は自分たちでできるが、大きな展開（マクロ）の面はどうしたらいいのか、市町村合併の中で、引継をどうしていくか、などのことである。いずれも、自分たちでできることは最大限しているが、それでも手が回りがたい点の吐露である。市民参加を目指す県としての立場があり、自分たちで活動し充実もしているが限界も感じておられる市民の方々の立場がある。結局、そこをうまく接続するにはどうしたらいいのか。まさにそれを考えるきっかけとなる協議会であったと思った。

教育フィールドの開発

丹波市棚原地区

丹波・棚原に在野のアーキビストを、 そして草の根資料館を

はじめに

現代的教育ニーズプログラムの事業は、地域歴史遺産を守り、活用し地域づくりに貢献できる人材を社会人にも育成するという目標が含まれている。しかし具体的にどのように実現していくのか、大きな課題を残してきた。

私は、阪神・淡路大震災以前から民間所在の史料保全と活用のためには、地域歴史遺産の保全思想と知識、そして最低限の技術を持つ市民の育成の必要性を訴えてきた。そして地域歴史遺産に能動的な活動を展開する市民を「在野のアーキビスト」と呼び、育成の必要性を強調し、自らの所属する地域や団体の記録保存に積極的な貢献を期待した。その意味からも、現代的教育ニーズプログラム事業に社会人の人材育成を盛り込むことの必要性を痛感していた。

宝塚の古文書を読む会を設立し、11年たった今もボランティア講師として関わり続けるのも、その実現を願ったのことにほかならない。その甲斐あって、受講者で作る世話人が毎年機関誌『源右衛門蔵』を発行し、受講者が今度は講師となって初心者講座を開催するなど、自立した動きを拡大している。しかしテキストは、被災して救出されボランティアによって整理された和田家文書を利用して、「在野のアーキビスト」として腕を発揮する場はきわめて限られている。

一般論でいえば、古文書に興味のある市民を「アーキビスト」に育てるには大きな壁がある。古文書を読みたい市民は少なくないが、それはくずし字を解読することに喜びがあるのであって、当時の社会や歴史研究に直接関心を持っているわけではない場合が多い。ましてや単調で忍耐力の必要な古文書整理や、他人の利用に奉仕するアーキビストの仕事を積極的にやりたいわけではない人はなおさら多い。だからこそ、現代的教育ニーズプログラム事業の社会人育成も、朝来市などで努力を積み重ねているが、古文書の文字面を読むこ

とに市民の関心が向かいがちだった。

しかし、丹波市棚原地区のパワーアップ事業委員会は大きく違っている。ここで「在野のアーキビスト」を養成する試みを行っている。

棚原区パワーアップ事業委員会

棚原区は、康応2年（1390）の熊野本宮大社文書の春日部庄玉泉坊引檀那願文にみえ、近世では寛永11年（1634）亀山藩領、元禄10年（1697）亀山藩と幕府領との入り組みとなり、寛延元年（1748）亀山藩領となった。天保郷帳では村高1,189石の大村である。天正15年（1587）、文禄4年（1595）、慶長16年（1611）の検地帳が残り、丹波市指定文化財になっている。

地区内の庚申堂には近世以来の古文書があり、大正2年（1913）住民の上田捨蔵氏が調査し、箇条書きの目録を残し、さらに大正5年、このうち主要な古文書を卷子本にして保存している。

パワーアップ事業委員会は、地域の神社や祠、寺院、古文書などの地域歴史遺産を保護・継承して後世に伝え、次の文化資源を作っていくことを願って地元住民が結成した委員会である。丹波県民局の助成も得て、2004年度は、地区内にある神社や祠、寺院、古文書などをカラー写真で紹介した『棚原見てある記』（A5判、91ページ、700円）の冊子を発行。公民館事業「文化資源探訪ウォーキング」への協力を行った。また庚申堂内の古文書の第1回調査を行った。



2005年度は『棚原見てある記』に掲載した史跡のうち11カ所に立て看板を設置、映像でも伝えていくためにビデオ映像の作成にも着手した。さら

にホームページ開設、文化資源マップ（４コース）の作成、恒例の棚原文化祭「故郷・棚原の文化まるごと見て食べあるきまショー」では地区内を探訪した。また７月２４日には、丹波市教育委員会や村上完二市文化財保護審議会委員長らの協力も得て、古文書の第２回調査を実施、大正２年の目録との照合を行った。

地域連携センターとの出会い

棚原地区との出会いは、昨年秋、松下正和助手（歴史資料ネットワーク事務局長）が水害被災調査で丹波市教委を訪問したことに始まる。教育委員会を通じて、７月に実施した古文書調査の目録を送ってもらい、同時に棚原区パワーアップ事業委員会が、「専門家を招き、できるだけ多くの住民の参加を得て、古文書を読む会を開き、専門研究者に解説をゆだねるのではなく、自らもともに学び、また文字の解説に終始するのではなく、当時の棚原の生活や社会を研究し、歴史を再構築する」という願望を持っていることを知った。

２月８日、坂江渉地域連携センター研究員、松下史料ネット事務局長と大国が現地を訪問、地区の公民館で市教委の高雄由紀子主査（学芸員）の参加も得て、委員会の役員と顔合わせを行った。

高雄主査からは、地域遺産保全と活用のモデルケースにしたいとの表明があり、松下事務局長から史料ネットの取り組み、水害被災史料の救出活動の報告、坂江研究員から地域連携センターの活動の紹介、大国から草の根資料館としての神戸深江生活文化史料館の紹介と、在野のアーキビストの必要性と棚原地区への期待を語った。

午後から庚申堂に入り、古文書を搬出、拝見した。簡単な目録は取られているものの、酸性紙封筒に入れられ、目録も１点ごとではなく、差出人・宛名などの情報もない。また古文書には番号が付けられておらず、目録との照合も簡単に出来ないことから、目録を取り直す必要があること、２、３カ月に１度のペースで１日単位の日程で現地を訪れ、住民と大学側と共同で整理し、読む会をセットで開催することで基本合意した。また古文書の全体像を簡単に説明した。元禄の山論絵図の写しが残っており、茶畑、毘沙門など今はない地域の描写が関心を集めた。

２回目は古文書の調査に着手し、より詳細に今後の方針を決める目的で３月１３日に訪問した。松

下・坂江・大国に加えて、神戸大学院生の樋口健太郎君・正木有美さん、学生の内田美咲さんのほか、丹波・市島が古里で毎週のように帰郷している宝塚の古文書を読む会世話人の芦田迪子さんも参加した。宝塚の古文書を読む会で育ってきた市民の力を、新たな地域で活用する機会になればと、条件の整った芦田さんを大国が誘い、快諾を得たのである。

午前中は、役員５人の参加を得て、４班を作り、それぞれ目録カードを作成した。仮番号として班ごとにＡ～Ｄを冒頭に付け１番から通番で目録を取った。この分は事業委員会役員の三宅敏男さんがエクセルに入力することになった。

午後からは、市教委の徳原多喜雄文化財係長、高雄主査、村上文化財保護審議会委員長も加わって今後の方針を議論した。上田脩パワーアップ事業委員会事務局長から、名称は丹波・棚原の歴史文化資源研究会とし、事業案として、整理調査・古文書を読む会の開催・文化資源の研究とセミナー開催・来年度も丹波県民局へ助成を申請することの報告があった。

松下助手から、神戸大学地域連携センターとしても予算を確保し展開すること、大国から、古文書整理は、地域住民と大学側との共同作業として長期的に続けること、古文書を読む会は呼びかけ対象を広げて、棚原区全体から特に若い世代も意識して募集すること、事前にテキストを配布して日常から古文書に接する機会を確保すること、元禄の山論絵図を活用して、江戸時代からの地域変貌を確かめる歩く会の開催、地区広報紙に歴史コーナーの開設などを具体的に提案した。

経費としては、大学側の拠出と県民局からの助成を想定するほか、２００７年度以降は市教委も予算確保の努力をすることを申し合わせた。

また棚原区有文書以外にも、地元の旧家波多家に文書があり、丹波市が保管していることからこちらの調査も必要なことを確認した。４月に３回目の調査を行い、５月か６月ごろに第１回目の古文書を読む会を開催することを確認した。

おわりに

少子高齢化と合併によって、民間所在の史料は一層危うさを増している。若い働き手は都市に集中し、山間部は過疎化が進む。集落や旧家が消えこれまで保全されて来た貴重な地域歴史遺産が散逸

の危機に直面し、これに合併が追い討ちを掛ける。公務員数は削減され、組織の統合が進む。より広い地域を、より少ない人員でカバーする必要が加速する。

丹波市でも旧町時代に設立された郷土資料館はあるが、職員の配置はなく、閉鎖状態で、古文書はそこに無造作に積まれている。またアーキビストの最低限の知識もないままに展示されているため、画鋏で壁面に貼り付けられている古文書もある。

そんな中で、住民が地域づくりのために史料を研究者と一緒に整理し、解説を自ら行い、地域の歴史を再構成しようという、棚原の人たちは、史料保全混迷の時代に、輝いて見える。昼食の準備は固く辞退したが、昼食時には地元産のコシヒカリを使ったバラエティに富んだおにぎり、丹波黒豆の枝豆、味噌も手作りの味噌汁、フキノトウがテーブルに食べきれないほど並んだ。素朴な味に、地域を愛する人たち温もりを感じた。きっとこうした人たちなら、優秀な在野のアーキビストになってくれるに違いない。そう思いながらおにぎりをほうばった。

庚申堂は道路の拡張で取り壊しの危機にあるという。これ自体大変残念なことだが、現在の庚申堂は台風などでは雨が漏れてきそうで、古文書の保存庫としては適切ではない。公民館も老朽化していて建て替えの構想もあると聞く。そのプランが固まるまでに地域の盛り上げにささやかながら貢献し、草の根文書館、草の根資料館を作れないかと願う。

(文責・大国正美)

香寺歴史研究会

「香寺歴史研究会」は2004年10月23日に『香寺町史 村の記憶 地域編』の執筆者を中心として発足した。また2005年9月8日には「町史を読む会」が発足されるなど、地元住民の方々による研究活動の場が引き続き設けられるとともに、同町史の普及活動も熱心に取り組まれている。

香寺町が2006年3月27日の姫路市へ編入されることから、香寺町歴史研究会の位置づけは流動的であるが、会の運営について様々な模索を行いながらも、地道に研究活動を進め、現在は「集落誌

(史)」をまとめる試みが行われているという。

地域連携センターでは昨年度、共同研究として『香寺町史 村の記憶 資料編』編纂事業を行ってきたが、その過程における研究成果を町民の方々へ還元すべく、同研究会の場をお借りして研究報告を行った。日時・場所等については以下の通りである。

日時：2006年1月28日（土）

場所：香寺町中央公民館多目的ホール

報告：河野未央「村明細帳を読み解く～人々の生業とくらしについての一考察～」

当日の参加者約40名ほどであった。報告は、『資料編』に掲載された「村明細帳」について人々の生業を中心に各村の比較検討を行ったものである。質疑においては多くの発言を得た。質問のほか、報告への批判・助言も寄せられたが、そこでは自らの歴史研究の成果、あるいは地元ならではの知識が披露され、報告者にとっても得るべきところが多かった。また、そうした地元の方々の見解に触れることにより、『村の記憶』執筆者の方々がいかに地元の歴史について、熱心に研究に取り組んできたかを実感した。十分な意見交換を行うことができ、有意義な会であったと思う。なお同報告の内容は、年報『ふるさと香寺』第7号（2006年3月発刊予定）に掲載される予定である。

今後も『村の記憶』普及活動、あるいは『通史編』編纂事業の一環として香寺歴史研究会と大学とのこうした研究交流の場をもつことが期待される。

(文責・河野未央)